

集落の話の聴き手だより

第12号

2024.09

今月は... 古谷

- ・古谷溪谷の紅葉が自慢！
- ・十石峠は米が1日十石(25俵/1,500kg)運ばれたことが由来
- ・「乙女の滝」はかつて夫婦滝(めおとだき)と呼ばれていた

語り手 市川 健
市川 典子
小須田 はる枝
荻原 純子
由井 照子



古谷の手作り立体地形図

古谷は、大日向の1番群馬に近い集落。古谷ダム、十石峠、鉱山、林業炭焼きと歴史ある地域です。

古谷の公民館の廊下には集落の様子を表した立体地形図が大きなガラスケースの中に置かれ、隣には、手書きの文字でこう書かれています。

“時代の変遷と共に産業構造も大きく変化し、大人と子どもの繋がりも希薄になってきた。昔から使われてきた地域の地名、地形、山河は、どの様な水流があるのか、地域住民の記憶が有る内に伝承し、知恵を生かし、若い世代に残していくことを目的に子ども、両親、祖父母の三世代が協力して地形図を作り始めた。”

今回は古谷のみなさんに、この立体地形図が生まれるまでの軌跡を教えてくださいました。



古谷にある立体地形図

集落をもっと身近に！

立体地形図誕生までの道のり

話は30年前に遡ります。当時は集落に子どもが多く、PTA活動や若妻会の“こもれ陽”や老人会もあり、活発に活動していました。集落の外から来る人も多く、国道299号の待避所の広いスペースには外から来た釣人の置いていったお弁当やおにぎりの包装が常に捨てられていたそうです。そんな状況をどうにかするため、「花を植えたら、ごみを捨てる人がいなくなるのではないかな。」と住民の発案で花壇を作ることに。この出来事が、さまざまな地域活動のきっかけとなりました。

お嫁に来られた小須田はる枝さん、由井照子さんはまだ土地や山の名前が分からず、なかなか地域の人の話題についていけないでいました。はる枝さんが、夫の代わりに出た道普請でその話になり「みんなが分かるように、地図を作ったらいいのではないかな？」と声が上がりました。

高齢の方からこの土地ならではの話を聞く良い機会だということで、古谷生まれの荻原純子さん、市川典子さんも加わり地形図を作ることになりました。

早速、地形図制作の話合いが始まります。古谷は十石峠まで起伏に富み、奥まで続いているのが特徴の集落です。しかし、通常の山の地図は、慣れない人には分かりにくいもの。そこで市川健さんは、「立体の地形図にすることで、自分たちの住んでいる場所の久保（谷）や沢がより分かりやすいのではないかな。」と思い付きました。立体のものであれば、小さな子どもにも伝わりやすいと多くの人が賛同し、立体地形図を作ることになりました。こうして、集落の三世代で協力しながらの制作が始まりました。

そこに暮らした人の気配を感じる

古谷の不思議な地名たち

実際に作りながら高齢の方から古谷の話を聞いていきました。その時に聞けなかったら、もう聞けない話ばかりだった、とみなさん口を揃えます。中でも地名に関してのエピソードは、とても興味深いものでした。立体地形図の中には、一見不思議な地名を見ることができますが、それらはそこで起こった出来事が由来になっているものだということが分かったのです。

例えば、“死人久保（しびとくぼ）”。その谷（久保）で亡くなった人がいるから、付けられた名前です。“お倉久保（おくらくぼ）”は、お倉さんがそこで迷ったから。“十衛門久保”、“文助久保”、“六兵久保”も、それぞれそこで十衛門さん、文助さん、六兵さんがそこで薪を切ったり炭を焼いたりしていたことが由来になっているそうです。

立体地形図の中には、そのような昔から受け継がれている地名を見ることができます。

また、この辺りは鉱物などの採掘が盛んに行われた場所でもありました。土壌づくりに欠かせない大規模な石灰石採石山があったり、クローム鉱山には岩の穴を開けるために専門の鉱山師がわざわざ岐阜からやって来るほどでした。第二次世界大戦中には、政府が飛行機のプロペラ等を使う重要な鉱物の採掘のため多額の支援をしていました。立体地形図制作

メンバーだった由井秋良さんも、石堂クローム鉱山に勤めていたそうです。秋良さんだけでなく、同じくメンバーだった由井良一さんと由井定人さんをはじめ、集落の殆どの男性は鉱山の採石や、炭焼き、山仕事を生業としていました。みなさん地元を愛し、山に詳しい方たちです。このように、古谷では昔から今に至るまで、人々と山の関係はとても深いものだったのです。

試行錯誤の手作り立体地形図

完成まではなんと1年3か月！

立体地形図は、コンパネのサイズに合わせて6700分の1で作ることにしました。悩みは、粘土の材料を何にしたらよいかということでした。市販の紙粘土では費用がかかりすぎるため、考えた末に古新聞で作ることにしました。全員で古新聞を裂いて、煮て、ミキサーにかけ、糊を混ぜるというやり方で進めていましたが、カビが生えたり、うまく形にならなかったりと失敗の繰り返しだったそうです。しかし、内装業をしている平岡博幸さんが質の良い糊を手配してくれ、そこからはうまく作業が進むようになりました。

縮小版の地図をコンパネに貼り、等高線を見ながら子どもたちが高さを調節し、粘土を少しずつのせます。乾いたら、水彩えのぐで色付け。針金の鉄塔は、実際に鉄塔の付近で山仕事をしていた大林義明さんが作りました。「とうちゃんは（立体地形図作りが楽しみで）頭とかして、鏡見て（身だしなみを整えて）出てったって、おばちゃんから聞いたよ。私たちもみんな、やっている期間はすごく真剣だったよね。」と照子さん。仕事帰りの夜や、土曜日に公民館に集まり、大人も子どもも協力しながら少しずつ制作を進めました。

立体地形図を作り始めたのは、平成5年の1月。地道な作業を繰り返しながら、平成6年3月30日ごろようやく完成しました。およそ1年3か月の大作ができたのは、今から遡ること30年も前のことです。地形図の脇には、地元の山にある樹木の標本が同じ太さに切り揃えられて1つ1つパソコンで名前を作って貼り、置かれています。どちらも合わせて、集落の歴史を語り継ぐものとして同じケースの中に大切に保管されています。

この活動をきっかけに、地区のどんど焼きが復活したり、みんなで海水浴、野球観戦にも行ったそう。それが現在まで続く古谷の活発な地域の活動に結びついています。三世代をつなぐ立体地形図。今なお特別な思い出がある作品です。



新聞を裂いて、一生懸命手伝っている様子



粘土になる新聞をこねる子どもたち
手が空くと、公民館の棚によじ登って遊びました。現在そこには、炭焼きが盛んだった頃の貴重な炭俵が飾られています。

立体地形図制作を収めた

秘蔵映像が30年の時を超えて蘇る！

今回、市川典子さんから30年前の立体地形図制作の様子を収めたビデオをお借りすることができました。この映像の制作者は、NHK長野放送局長賞を5回受賞された市川長太郎さんです（川久保在住）。

ビデオテープは30年前のものとは思えないほど状態がよく、大切に保存されていました。映像を見てみると30年前にタイムスリップしたような興奮に包まれました。



立体地形図完成記念写真

今回、みなさんの許可を得てビデオ映像をYouTubeにも公開することになりました。

こちらのQRコードから見るができますので、ぜひ多くの人にご覧いただければ幸いです。
古谷のみなさま、ご協力ありがとうございました。



聴き手 大波多 志保
川嶋 愛香
文章 大波多 志保
編集 櫻井 麻美
デザイン 西澤 ユキ



畑ヶ中 と 人の暮らし



畑ヶ中は十石峠に通じる武州街道の通過集落である。宿場町としては旧佐久甲州街道沿いにある高野町があったので、畑ヶ中は旅人にとっては単なる通過点に過ぎなかった。付け加えると、武州街道は江戸に通じる道で、多くの旅人が利用していたという。

国道299号沿いにある陽だまりの家を通り過ぎ、抜井川を渡ってすぐ斜め右に入る。そこから畑ヶ中が始まる。畑ヶ中は3つの常会に分かれる（一の淵、下村、上村）。比較的に平坦な土地があり、近年、次々と新しい家が建てられてきた。

しんがいきみとも

新海公友さんは、海瀬郵便局長を長年務めて退職し、今年から畑ヶ中の区長をしている。

「子どもの頃の思い出といえば、小学生の頃、弟と学校へ行く道の脇に用水が流れていて、葉っぱの船を作って、流れていく船を追いかけてたり、競争をして遊びながら、学校へ行きました。中学生の時、友達と水晶取りをしたことがあります。抜井川の土手にトンネルのような大きな穴があり、そこから水が流れ込んでいました。その大きな穴に入り込んで、水晶を取りました。円錐形をしているので、簡単に見つけられました。家に持ち帰って飾りました。私の宝物でした。そうそう、子どもの頃はホタルが余地川からいっぱい庭に飛んできました。綺麗でした。それが当たり前前の光景でした。」

公友さんの家の近くに木造平屋の建物がある。前の海瀬郵便局の建物である。「最初の郵便局は、川久保にありました。木造2階建ての建物で、1階が郵便局で、2階が何のために使われていたのか定かではありません。古い郵便局資料には、昭和4年9月開設と書かれてありましたが、それが、川久保にあった郵便局なのか、家の脇にある郵便局のことなのかが分からないのです。」公友さんは川久保にあった郵便局の写真を見せてくれた。

現在の畑ヶ中は271軒ある大きな集落。地形的に平坦な土地が多いせいで、町内外から若い世代の家族が家を建て、住んでいる。この2、3年の間でも、毎年5軒から8軒世帯数が増えている。以前は桑畑と田んぼが多く、長閑な景色が広がっていた。一時期は子どもの顔を見ることがなかったが、今は子どもの顔を見るようになったという。

かおる

新海馨・ミナミ夫妻の案内で、上村（うえむら、あるいは、うわむらと呼ばれている）・下村（したむら）を車で走る。細く、曲がりくねった道が多く、運転は注意が必要である。その細い道沿いに新しい家が建っているのを見て、「ええ〜、ここにも家が建っている。知らなかった。」と、新海夫妻は驚きながら話しかけてくる。馨さんの案内で、集落センターの脇にある石塔と般若堂（肉筆般若経が保管されている町指定の文化財である）を見た後、昔の養蚕所（現在は第1常会集会所になっている）に行った。

馨さんは、ここで生まれ、育った。「子どもの頃、この辺り一帯は桑畑だった。桑畑を田畑に変えるために男性に交じて女性たちも力仕事をしてました。それも1年や2年で終わる開墾ではなかった。」その当時の写真を見せてくれた。

「私の頃は、小学校は佐久中央小学校で、兄が通ってた海瀬小学校ではなくなりました。学校へ行く道の思い出はありませんが、帰り道にメド（桑の実のこと）をたくさん採って白色のランニングシャツの中に入れて持ち帰ったら、シャツが赤紫色に染まっていまい、驚いた記憶があります。」

「私は末っ子です。一番上に兄、二番目から4人の姉たちがいます。私以外は、みんな県外に住んでいます。大学生だった兄が夏休みに帰って来て、勉強を見てもらったのですが、怖くて顔は上げられませんでした。兄は東京の大学を出て、そのまま就職。姉たちも都会から帰ってくるたびに、様子が変わっていくのです。着る服が変わり、化粧が変わり、輝いて帰ってくるんです。羨ましかったです。それで東京にあこがれて3年住んで、畑ヶ中に戻って来ました。」

「3年ほど、従兄の畠山修（元町議員）さんの木工所で働いていましたが、千曲病院の調理人に採用され、定年まで勤めました。元々手作業は好きでした。子どもの頃は春の雪が降ると、雪像を作って遊びました。動物や兵隊さんの像を一人で作って遊んでました。冬の雪はサラサラすぎて、固まらないので、春の雪まで待ってた記憶があります。結婚する時に作ったタンスは、私がデザインをして、修さんに彫ってもらって作ったものです。」そのタンスを見せてもらったが、既製品とは違う味わいと深みがあった。



馨さんがデザインしたツタの葉

しげお

佐塚滋男さんは、上村（うえむら）生まれである。「この辺りは、みんな養蚕を生業にしてきた。昔は、大きな田畑なんかなかったの、唯一の現金収入になる養蚕をしていた。どこの家でもそうだったけど、子どもはみんな家の手伝いをした。親がはしごに上って桑の枝を切って落とすのを下で拾って、リヤカーに積んで家まで運んだ。山ほど積むもんだから、途中でパンクしてしまう。親父がリヤカーを持ち上げて、俺がチューブを引っ張り出す。パンクはしょっちゅうだから、空気入れとパンク直しのゴムと接着剤は持ってた。年4回（春、夏、秋、晩秋）養蚕作業だったので、忙しかった。川に遊びに行きたくても、親父の許しが無くては行けなかった。それを不満だとは思わなかった。周りのみんなも同じことをしていたし、家の手伝いをするのは当たり前だと思ってた。」

「それでも、夏は川遊びがしたくて、親父に頼んで時間を決められて遊んだ。抜井川は今より水量はあったけれど、石を積み上げて水をせき止めて、深みを作って遊んだ。男の子と女の子も一緒に遊んだことがある。蚕の話に戻すと、春になると、家の畳は上げて、板の間にする。そこに蚕さまを2段重ねにして育てる。なにせ、蚕さまだから、人間は家の隅にかたまって寝る。それが晩秋まで続く。晩秋の繭取が終わり、座敷の板の間を掃除して畳を戻して、大の字に寝られた時は、子ども心に嬉しかった。今考えると、えらい時代だった。でも、“生きる力”、“耐える力”、“我慢する力”がついたと思う。」

滋男さんは、旧佐久町役場に4年働いた後、24歳になった時バリ行きを決心し、いったん退職する。パリではアルバイトで生活費を稼ぎながら、フランス語を学んだという。

「2年間の留学を終え、帰国した時、思ったことがある。『人間どこへ行っても生きていける』ということ。行く前は不安ばかりが大きくなるが、実際に生活を始めると、なんだ生きていけるじゃないかという思いになる。自分がやりたいことが



川久保にあった最初の海瀬郵便局

あれば、どんなやればいいと思う。やってしまえば、何とかなるものです。」滋男さんは、帰国後、旧佐久町役場に復職し、定年まで働く。今は、趣味に生きている。仏像彫りと水彩画に熱中して、毎日過ごす。若い時に思い切ったことをしておかないと、後悔する。自分の人生1回きり。自分が描いた人生を生きることは最高だと言う。



畑ヶ中の開墾が終わった記念写真

あきら

細萱彰さんは、旧望月町生まれである。大学を卒業してすぐJICA青年海外協力隊員でパラグアイに派遣された。2007年から2009年まで小学校教員（体育）として首都アスンシオンからバスで6時間かかる町、ヘネラルアキノで2年間活動した経験を持つ。「南米の人たちは、とても開放的で明るい。いい意味で適当なところがあり、自分を素直に出し自分らしく生きてます。ありのままの自分でいいということを学びました。」

パラグアイは日系人の影響が大きい。特に、農業分野では重要な輸出農産物の一つである大豆を導入し農業を発展させ、パラグアイの経済・社会の貢献してきた歴史がある。

細萱さんは日系人社会とは卓球を通してつながりを持つことができたそう。「パラグアイの日系社会はまさに日本のムラ社会です。日本人の顔をして、日本語をしゃべる。年中行事は、運動会や盆踊りがあり、餅つきでは女性たちが白い割烹着を着て、お餅を丸めているんです。それを見ると不思議な感覚になりました。」

大日向小学校に教員として働くために移住し、畑ヶ中での生活が4年目になる細萱さん一家。地域の行事には積極的に参加し、隣近所の付き合いを通して家族が支えられている実感を持てたという。「今年の道水路普請では水路の開け閉めを任されるようになりました。子どもたちには、『あいさつは大切なこと』だと伝えています。近所のおじいさんからは、『ここに子どもを連れて住んでくれてありがとう。子どもは宝だ。』と言ってくれたことが嬉しかった。」と話し、「子どもの力は大きいなと畑ヶ中に住んで思いました。近所の人たちの温かさを感じます。それに自然の豊かさが身近にあるのは素晴らしいです。近くを流れる抜井川にはホタルが飛んできます。この環境をしっかりと守っていきたい。」と、細萱さんは言う。



細萱一家



（文責 西村寛）

